

る。

問題	点画不足	想起不完全
校 顔 歩 書 風 道 海	校 類 顔 道	顔 顔 顔 顔 歩 書 風 海

学習指導要領によると、漢字の書くことのできる字数というのは、第二学年までに配当されている漢字を主として140字ぐ

らいとしめされている。その140字はどの漢字をさすかはしめされていないので、使用している教科書や児童の実態などから、めやすをきめておくべきである。しかし、これは一学年のみではきめることはむずかしい。六学年の見とおしの上にとって考えていくべきであろう。

- 明るい — 赤るい
- 道ろ — 童ろ
- 自分 — 自文

この例は、いわゆるこどものあて字といわれるもので、苦しんだ末にやつと生みだした表記でもある。いわば、同音の文字を仮借したあやまりともいうことができよう。漢字には音と形と義があり、このうち義をわきまえないためにこのような表記になるのである。

- 明るい — 光るい
- 読む — 話む

これらのあやまりもわずかではあるが見られた。判断に苦しむところであるが、光るところは明るいということで、こどもの体験上では両者を同じものであるとけとめているのであろうか。また読むということは、二年の段階では声をだして読むことにつながる。それが話すことと何か関連がありそうである。いずれにしても、漢字に対しての意識はいろいろあるということ、漢字の指導過程の中で生かしていきたいものである。

(5) ㊦ 書く(文・文章)

問題一

句点のうち方の問題で、難易度は一年とあまり

かわらない問題を提示した。

	一 年	二 年
会 話 文	59.6	56.3
平 叙 文	69.7	62.6

この表からみると、一、二年共に会話文のはいった文章に句点をつけることは苦手ようである。問題文の中で「……できますよ。」ということばをつかっている、こどもは少々抵抗を感じたのかも知れない。

句点の指導は、作文やノート指導とあわせてやるのが効果的である。文を書いたら「。」をうつという習慣をつけることがたいせつで、そのためには、一、二年で徹底して指導することが必要であり、教師もまた板書や掲示に「。」をつけることを忘れてはならない。

問題二

会話の部分に「 」をつける問題

学習指導要領では、「 」の使い方は三年で一応完成ということになっているが、二年では使用方を理解して、正しく使うようにするとしめされていることから、指導には十分意を用いたい。

よしさんが 行って きます。という、おかあさんは じどうしゃに気をつけてね。といました。

- 「行って きます。」 47.3
- 「じどうしゃに気をつけてね。」 51.4

両者とも正答になったものが、約40%しめている。残りのおのおの約10%は一方のみが正答ということになる。

ところで誤答の傾向をみると、「よしさんが 行ってきます。」「おかあさんは、じどうしゃに気をつけてね。」としたものが多くみられた。

これらのこどもたちには、基本文型の指導などをとおして、なるべく早く見わかるような能力を育ててやる必要がある。「○○は ○○だ」という基本文型さえおさえたならば、正しく指摘することが容易ではないだろうか。